
 <書 評>

福井 罔彦 (七沢病院副院長) :

老人のリハビリテーション

徳島大学助教授・理学療法部長

野 島 元 雄

はじめに、私は整形外科医であり下述の本書に対する記述が広い視野にわたって論ずることができないおそれのある点をお断りしておきたい。本書は、現時点で最も問題となる老人福祉に関して、リハビリテーション医学の立場から、著者の長年に及ぶ業績、経験にもとづき簡潔にまとめられた小冊子であるが、この方面に関心をもつ医療従事者、とくにパラメディカルの人々に裨益するところ大きい手頃な書であると考え

る。著者は老人を「外部からの侵襲により容易にホメオスタシスがくずれ、病的状態をもたらす、しかも次々と連鎖的に他の病態を招きやすい状態ないしはその準備状態」と定義し、この理念のもとに、まず生理的变化(細胞、臓器さらに器管レベルで)、精神心理的变化を要領よくまとめ(免疫に関する最新の考え方にも言及している)、上述理念に対して、パラメディカルの人々にとっては多少難解な点も少なくないと考えますが、老人のもつ心身の特異性を一応よく理解させてくれる。

次に、以上の展開のもとに、本書の重要な問題である「老人性疾患の代表的なものにつき、リハビリテーションの実際」へと移ってゆく。こ

こでは著者の長年にわたる経験の基盤のもとに、代表的な循環器、呼吸器、運動器、泌尿器疾患が、さらに心理、精神的障害が、上述、「老人」に対する基礎的理念のもとに、説明され、目的であるリハビリテーションの実際、そのテクニックの概要に及ぶまで一応よく網羅されている。著者の説く、老人障害のリハビリテーションゴールは、Self-Care に設定を余儀なくされる場合が少なくない。1つの障害は他の障害を逐次、相関的に招きやすいこと、温い周囲の Care のもとに実際に展開されるべきことなどを強調しているが、これらは自明の理ではあるが、日常ややもすると、老人障害者を臨床各科を盟(たらい)廻ししやすい私共にとって自省を与えてくれる説得力をもつ記述である。さらに、リハビリテーションの面から、以上の各疾患、障害を観察すべきことを強調し、随処に、評価表(とくに著者の工夫したものを含め)が挿入され、訓練の実際に関するポイントの記載と共に、訓練の場においても役立つ点が大きいものと考え

る。なお、私共が関係する整形外科の立場より、上述、運動器疾患ならびにその対策に関しても、一応よく正鵠をえたものと考えられ、著者のこ

の方面に対する知識の豊富さ、経験を積まれたことに対して敬意を表するものであり、訓練中でのリスク管理(最も問題となるのは心肺機能であるが、運動器に関しても)に関する記述も適切に述べられ、著者と共に絶えず留意すべきことを強調しておきたい。

以上の老人性疾患に関するリハビリテーションの目的は、この章に続く、「寝たきり老人」(著者は、寝たきり老人を医学的治療、リハビリテーションなどにより離床の見込がない60歳以上の老人と定義している)に陥るのを可及的に防止することに存在するとの基盤に立って、老人性疾患の上述特異性を明らかにし、傷害と共に生きる前向きの姿勢を鼓舞すべきであり、寝たきり老人に対しては、多少とも心身の activation(些少ではあるが残された機能)を活用し、その低下を防ぎ「ひと」として養護すべきであるとの見解には何人も異論のないところであり、この見解、理念のもとでの教導書としての要点をまとめたものであるというのが私の卒直な読後感である。

ただ、上述したように、パラメディカルの人々、ケースワーカー、ホームヘルパーなどの従事者をも対象とされる場合、多少、医学的専門用語などに難解な点が少ないとも考えられるが、これらは、適切な脚注補遺、他の専門書への紹介などにより補われるであろう。

(A 5・頁288・図43・写真2・

¥3,000・¥200)